



きました。  
粗抽出アレルゲンとアレルゲンコンポーネントを組み合わせることで検査することにより、臨床的感度の向上、あるいは臨床的特異度の向上が見込まれます。  
現在、日常診療で利用可能なコンポーネントは、次の10項目です。

- f76 カゼイン (牛乳由来)
- f77  $\alpha$ ラクトアルブミン (牛乳由来)
- f78  $\beta$ ラクトグロブリン (牛乳由来)
- f233 オボムコイド (鶏卵白由来)
- f416  $\omega$ -5グリアジン (小麦由来)
- f423 Ara h 2 (ピーナッツ由来)
- f353 Gly m 4 (大豆由来)
- k220 Hev b 6.02 (ラテックス由来)
- f441 Jug r 1 (クルミ由来)
- f443 Ana o 3 (カシューナッツ由来)

●特異的 IgE は、アレルゲンが体内に入ってからどのくらいで血中に検出されるの？また、どのくらいでなくなるの？

一般的に、大量のアレルゲンに一度に曝露された場合、特異的 IgE は一過性に上昇して5-10日程度で上昇のピークを示し、3-4週間で徐々に下降するとされています。しかし、アレルゲンに繰り返し曝露された場合は、特異的 IgE は曝露されるたびに上昇し、低下しにくくなるとされています。

●薬剤を使用していると、測定値に影響する？

抗ヒスタミン剤や外用のステロイド剤が、測定値に影響を及ぼすことは原理上考えられません。  
以下の薬剤を投与された場合は、影響を受ける場合があります。

1. 検査試薬との結合を阻害する薬剤  
IgE に結合する薬剤 (抗 IgE 製剤など) を投与した場合、検体中の IgE に薬剤が結合することにより、検査キットによっては、キット構成試薬 (抗ヒト IgE 試薬) との結合が阻害され、測定値が低下する可能性があります。ただし、イムノキャップ (受託している検査方法) においては、抗 IgE 製剤投与による総 IgE 測定値への影響は少ないと報告されています。
2. IgE 産生や血中半減期に影響する薬剤  
以下に例を挙げます。
  - ・高用量の経口ステロイド剤を長期に服用した場合、IgE 産生が抑制され著明に低下
  - ・抗アレルギー剤のうち Th2 サイトカイン阻害剤を服用した場合、IgE 産生が抑制され低下 (薬剤の添付文書に記載あり)
  - ・抗 IgE 製剤を投与した場合、血中 IgE 半減期が延長することにより上昇 (薬剤の添付文書に記載あり)
  - ・抗 IL-14/13 受容体抗体を投与した場合、IgE 産生が抑制され低下 (薬剤の添付文書、製品情報に記載あり)

## 〔 2 〕 ヘリコバクター・ピロリLA法

2020年6月よりヘリコバクター・ピロリLA法の受託を開始致しました。LA法は数種類の試薬が販売されておりますが当社ではH.ピロリラテックス「生研」のキットを使用しています。  
従来法では、10U/mL未満であっても3U/mL以上の陰性高値例の中に現感染・既感染例が存在するという問題がありました。  
Denka Latex kit (H.ピロリラテックス「生研」) は日本ヘリコバクター学会胃がんリスク評価に資する抗体法適正化委員会からの勧告に添付文書のカットオフ値 (10U/mL) を用いる事でピロリ未感染例と感染例 (現感染及び既感染) の最適診断精度が得られると記載されている試薬の一つです。  
従来法とH.ピロリラテックス「生研」の相関については表をご参照ください。  
良好な成績ではありますが数件の乖離の例があります。  
<http://www.keihin.gr.jp/image/kml-pdf/pylori2020-09.pdf>

日本の胃がんは肺がん、大腸がんについて患者数が多くヘリコ

